

日光山への熱き想い 宇都宮大明神社僧 貞禪

宇都宮伝統文化連絡協議会長 柏村 祐司

第16回



高塚(貞禪塚ともい)全景



妙言貞禪の拓本
「言」のよりに見えるが「言」である

国立栃木病院の東側の道を北上すると、環状線に出る手前で左側に円を描くようにカーブする。高さ三メートル程の塚を避けるためである。その塚を「高塚」という。

この塚の上に宝篋印塔が建ち、基礎部に「至徳四丁卯 八月七日 聖金剛佛子 妙言貞禪 大工國行 大工賢阿」等の文字が刻まれている。

『下野国誌』の著者河野守弘等は、妙言を妙吉と読み、臨濟宗の高僧夢窓疎石の弟子の妙吉について述べているが、妙言と読むべきで、注目すべきは貞禪である。

貞禪なる人物は、結構名を残している。輪王寺蔵の嘉慶二年(一三八八)銘の『五部大乘経』に、「宇都宮西経所住侶金剛仏子貞禪」の名がある。南北朝の頃に宇都宮二荒山神社に所属していた僧侶であることがわかる。ところで二荒山神社に坊さんが、と驚く人がい

るかもしれないが、江戸時代まで二荒山神社は、宇都宮大明神と称し、寺が付属し、僧侶も神主と一緒に活動する神仏習合の形をとっていたのである。貞禪は宇都宮大明神の境内にあった西の経所で写経をはじめ、経巻の作成・収集・読誦・配布など、広く經典類に接することを職務としていた僧であった。

貞禪は日光山へは、先の『五部大乘経』の他にも『金光明最勝王経巻』も寄進している。貞禪が日光山へ経巻を寄進した背景には、日光山と宇都宮大明神との強い関連が考えられる。貞禪は、その日光山を篤く敬っていたのである。

江戸時代に記された『新編会津風土記』に飯豊山麓の実川に所在する『日光山縁起』のことが記されている。これと同じものが愛媛県大洲市の宇都宮神社にもあり、そこには『当社並日光山縁起』とある。『日光山縁起』は、室町時代後期に写

されたもので、奥書に「至徳元年甲子仲冬初日願主金剛佛子貞禪」とある。原本は南北朝の至徳元年(二三八四)に、貞禪が書いたものである。なお、金剛佛子とは、密教で灌頂を遂げ、金剛の名号を受けたものである。

『日光山縁起』も「当社並日光山縁起」も上下二巻なり、大部分は日光山の由来を説明しているが、最後の部分に男体山之神と女峰山の神との間に生まれた太郎山の神が宇都宮へ移され、宇都宮大明神として祭られたとある。これらは、もともと宇都宮大明神の由来を述べようとしたもので、そのためには親神の由来から述べる必要がある。うとのことで、最初に日光山の由来を述べたという次第である。

日光山縁起が編まれた背景には、当時宇都宮大明神は、親神である日光山の神から分かれた若宮とする信仰があったことが考えられる。だからこそ大洲に分家した宇都宮氏の一族も、「当社並日光山縁起」を携えていったのであろう。また、宇都宮が日光山から分かれたということについては、鎌倉時代承久元年(二一九)の『続故事談』にも「宇都宮は権現(日光)の別宮なり」とある。日光山を篤く信仰していた貞禪は、そうした伝承を継承したく、巻き物として後世に残そうとしたのではなかったらうか。